

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19830090
 研究課題名（和文） ピア・サポートの視点に立った視覚障害者支援に関する研究
 研究課題名（英文） A Study of Visually Disabled Persons Support
 by Aspect of Peer Support
 研究代表者
 柏倉秀克（KASHIWAKURA HIDEKATSU）
 桜花学園大学・人文学部人間関係学科・准教授
 研究者番号：40449492

研究成果の概要：事故や病気で失明した視覚障害者が自立に至るまでのプロセスに着目し、当事者の心の変化をリハビリテーション心理学の視点から検討した。その結果、従来行われてきた援助方法（運動機能に障害のある人々に対する援助方法）では、十分な効果が得られないことが明らかになった。視覚障害者の精神面に配慮し、その回復を援助する方法として、ピア・サポートを取り入れた方法を実証的に検討した結果、一定の効果が確認された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,030,000	0	1,030,000
2008年度	1,210,000	363,000	1,573,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,240,000	363000	2,603,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：視覚障害者・心理的支援・自立支援・英国盲人協会・
スウェーデン視覚障害者協会

1. 研究開始当初の背景

病気や事故で失明した人々は、医療機関で障害宣告を受け、精神的に大きな落胆を経験する。当事者の多くは、外科的治療を終えたとリハビリテーションに進む。職業的な自立を目指す者は、さらに視力障害センターや盲学校で職業リハビリテーションを受けることになる。ところがこの段階においても精神面の立ち直りが遅れている事例が多く、職業リハビリテーションの断念をはじめ、精神疾患の発症、引きこもりへと移行する事例も珍しくない。中途障害者の援助方法に関する研究は、これまで主として肢体に障害のある人

々を対象になされてきたが、視覚障害者の実際のニーズに十分対応したものとはいえないように思われる。視覚障害者の援助は伝統的な理療業（はり、灸、あんま）に依存する形のまま、精神面では肢体障害者対象の援助方法をそのままあてはめているのが実情である。そこで筆者は、中途視覚障害者の実情を把握し直し、視覚障害固有の問題に留意し、中途視覚障害者が「主体的」な生活を取り戻すための援助方法を開発する必要があると考えた。

2. 研究の目的

(1) 中途障害者を対象とする従来の援助研究を整理し、その意義と課題を明確化しつつ理論的実証的研究にとりくむ。

(2) とくに従来の援助方法で受障後の立ち直りが遅れている事例に着目し、視覚障害者の障害特性を考慮した援助方法を開発する。

(3) 臨床現場では、同一の障害のある人による支援（以下、ピア・サポート）が精神面の回復に有効とされてきた。本研究ではその効果を検証するとともに、ピア・サポートの視点に立った援助方法の開発を検討する。

3. 研究の方法

(1) 中途視覚障害者問題の特徴を検討するとともに筆者の問題意識を明らかにし、研究目的と方法について検討する。

(2) 中途視覚障害者問題を歴史的に考察するとともに、今日における視覚障害者問題の全体状況を把握し、ICFの視点から視覚障害者問題の考察を試みる。

(3) 中途視覚障害者を対象にメンタルヘルスに関する調査を実施し、その考察を行う。

(4) 中途障害者のメンタル面を支援する研究について整理し、受障者の心的困難の緩和に効果的な支援のあり方を検討する。

(5) 中途視覚障害者のメンタルヘルスとその関連要因に関する調査を実施し、その考察を行う。

(6) 障害者地域生活支援センターにおける障害者地域生活支援事業に、筆者の提案する援助方法を取り入れた相談援助を試行し、その効果を実証的に検討する。

(7) スウェーデン・英国における先進的な視覚障害者援助実践を実地調査し、本研究における援助方法との比較を試みる。

(8) 以上の研究をふまえて、中途視覚障害者の心の問題に着目した援助方法を理論的に整理する。

4. 研究成果

(1) 視覚障害者問題の特質と支援上の課題
視覚障害をどうとらえるか
全障害で視覚障害者の占める割合は最も低い、重度者の割合が高い障害である。な

お視覚障害者の大半は弱視者で占められている。受障時期は働き盛りの中老年が多く、生活問題の困難さに結びついている。さらに視覚障害による移動困難は、社会参加を著しく制限している。

視覚障害者支援の歴史と現状

一部の専門的職業（あんま、はり、きゅう、以下理療業とする）に就くことができた視覚障害者は手厚く保護されていた。わが国における障害者支援は職業的自立を前提としてきた。このため理療業で安定した就労を果たすもの以外は、生活面で厳しい状況に置かれていた。

(2) 中途視覚障害者のメンタルヘルス

職業リハビリテーション・プログラムにおいては、ピアの仲間によるコミュニティが形成される場合が多い。コミュニティにおける相互支援は、受障者のメンタルヘルスの安定に好影響を与えていた。コミュニティにおけるピア・サポートの効果を分析するため、プログラムに参加する受障者と、参加していない受障者のメンタルヘルスを分析し、比較検討した。プログラムに参加する受障者のサポート量とメンタルヘルスの関連を分析した結果、仲間サポートが低い群のメンタルヘルスは、有意に低かった。家族サポートにおいては有意な関連はみられなかった。以上の結果から、仲間サポートを受けた受障者のメンタルヘルスは、安定する傾向を示すことが確認された。

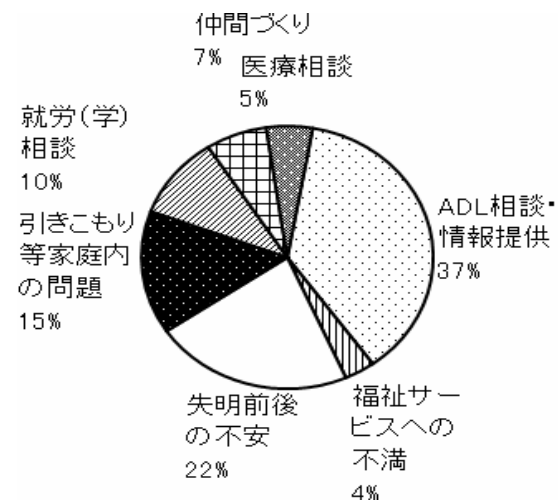


図 ピア相談の内訳

(3) ピア相談員による視覚障害者支援
ピア相談員による支援の実際
名古屋市内の障害者地域生活支援センターで相談業務を担当する相談員（障害当事者）の協力を得て、中途視覚障害者の相談支

援の現状について調査した。

ピア・サポートによる回復支援

相談者の大半は中高年で、その多くは進行性のロービジョン患者で占められていた。日常生活に関する相談が多くを占めていたが、心理面に関し不安を感じている相談者が多くみられた。精神疾患を訴える事例を除き、ピア・サポートによる効果が確認された。

(4) スウェーデンにおける視覚障害者支援 スウェーデン視覚障害者協会 (SRF)

SRFはスウェーデンにおける視覚障害者支援の権利擁護の中心的役割を担っている。近年 SRF は就労支援に力を入れている。SRF の専門家は、職業安定所と連携して受障直後から就労に至るまできめ細かな支援を実施していた。

ロービジョンクリニック

全国 31 のクリニックは各県で運営されており、利用者の年齢や障害の程度に応じた支援を実施している。受障原因は加齢性の疾患によるものが最も多い。心理面のサポートは、同じ障害のある利用者による相互支援に特色があった。

スウェーデン特別支援教育局

同国は“A School for All”に象徴される教育政策によって聴覚を除くすべての障害児が通常の学校で学ぶシステムになっている。通常の学校において困難とされる特別な支援は、リソースセンターや巡回教師によって適切に補われていた。

(5) 英国における視覚障害者支援

英国盲人協会 (RNIB)

RNIB は英国の障害当事者団体の中でも最も古い団体の一つで、視覚障害児者の教育、福祉、職業等の支援事業を展開している。本視察では、就労支援と中途障害者の心理面の支援を中心に調査した。後者は、数名のグループワークをホスト役のスタッフが支援する形で進められ、効果をあげていた。

Action for Blind People

RNIB 同様、古い歴史を誇るこの組織は、就労支援事業を中心に、障害理解を促進する活動、余暇活動を支援する事業に特色がみられた。例えば同組織の雇用アドバイザーは、履歴書の書き方から就労先への定着に至るまでの支援を実施していた。なお心理面の支援は、失明宣告直後からなされ、各種情報提供をはじめ就労支援を側面から支援している。

The Royal National College for The Blind (RNC)

RNC は視覚障害学生を対象とする高等教育機関で、就労支援に特色がある。職場で必要とされるスキルを身につけるための訓練や学内外で行われる職場体験が手厚くなされており、就労実績をあげていた。

(6) 中途視覚障害者に対する援助方法

中途視覚障害者の抱える問題の解決には、どのような援助が求められているのか。これまでの研究から配慮すべき二つの要素が明らかとなった。一つは、専門家によるものであれ非専門家によるものであれ、精神的にも社会的にも孤立しがちな受障者の問題を客観的にとらえ、受障者を芯から支える「援助」であること。もう一つは、程度の差こそあれ、すべての中途障害者が直面する心の問題に適切に対応した「援助」であることである。

上記に挙げた二つの要素をふまえて、援助方法を検討した。はじめに受障者の内面的な問題（心の葛藤など）に対してどのような援助がなされるべきかを考察した。次に援助事例の検討をふまえ、援助方法を総合的に考察した。さらに社会福祉援助論における本研究の位置付けについて明確化した。その上で中途視覚障害者に対する自立支援のあり方、自立支援を進める前提となる受障者の心の問題に配慮した援助方法を提案した。最後に援助の担い手として期待される福祉・医療の専門職や非専門職の問題を取り上げ、その役割と援助方法を示した。

(7) まとめ

障害者地域生活支援センターにおけるピア相談の実態を調査した結果、相談目的は視覚障害に関する相談が多くを占めていたが、相談の過程で障害に起因する心の問題が語られていた。相談者の多くは生活上の困難、失明への不安、現在の職業の継続または再就職への不安を抱えており、その中には精神症状が疑われる事例、精神医療の範疇に含まれると思われる事例が散見された。ピア相談員による相談援助は、受障者の心の問題、生活ニーズに対応するソーシャル・ワーカーとしての支援となっていた。

本研究で取り上げたピア相談員による支援は、フォーマル・サポートとインフォーマル・サポート両者の援助特性を兼ね備えていた。ピア相談員は、支援センターにおいて直接的な支援を行うことができる。さらに受障者と受障経験を共有していることから、受障者が必要とする援助を的確に把握することができる。また受障者にとってピア相談員は、役割モデルと見ることができ、将来の見通しを立てることができる。このことは、受障者に安心感を与える支援となっていた。

スウェーデンや英国における当事者団体の視覚障害者支援の現状をふまえて、援助

方法について検討を重ねた結果、ピア・サポートの視点にたった援助方法を提案することができた。だが、この方法を他の障害種別に適用した場合の援助効果について検討することが課題である。他の障害種別における援助研究と連携し、議論を重ねる必要がある。

中途視覚障害者の自立支援は、理療業を中心とする職業的自立に目標が置かれてきた。その背景には職業的自立が障害者の自立だとする伝統的自立観が見え隠れする。ノーマライゼーションの思想や自立生活運動の成果、ICFの理念に立脚した自立観を検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

柏倉秀克、視覚障害者問題の特質と支援上の諸課題、桜花学園大学人文学部研究紀要、10、19-35、2008、無

柏倉秀克、スウェーデン・イギリスの視覚障害者支援、視覚障害、241、35-42、2008、無

柏倉秀克、スウェーデンにおける視覚障害者支援、桜花学園大学人文学部紀要、11、9-19、2009、無

柏倉秀克、青松利明、保健の科学、51(4)、281-285、2009、有

[学会発表](計2件)

柏倉秀克、ピア対話員による視覚障害者支援、日本福祉心理学会、2008

長崎龍樹・柏倉秀克、弱視者の対人行動に関する一考察、日本特殊教育学会、2008

6. 研究組織

(1)研究代表者

柏倉秀克(KASHIWAKURA HIDEKATSU)
桜花学園大学・人文学部人間関係学科・准教授
研究者番号：40449492

(2)研究分担者

(3)連携研究者